

黒の剣士と剣の魔術使 い

ヤトノカミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二人は出会いそして戦う。人によって作られた世界で。剣の描いた世界で。

※ソードアート・オンラインと衛宮士郎のクロスオーバーです。アリシゼーションまでやるつもりですのでそれまで見て下さると嬉しいです。感想などあればどんどん書いてくれると嬉しいです。

目次

プロローグ

1

剣の世界

3

プロローグ

始めはちよつとだけの興味から来るものだった。

街にあった広告にあったβあるゲームテストに目を引かれて興味本位で募集したらまさか自分が当選するなんて思わなかった。当たった後、悪友慎二に報告したらかなり悔しがっていた。そして自分は当たらなかつたと言っていた。

その後は急いでナーヴギアを買いそのソフトをインストールした。俺はそのゲームでのキャラ設定とプレイヤーネームを決めた。プレイヤーネームは「ヘミヤ」。名前をプレイヤーネームにするのはどうかと慎二に言われたが俺はそこまで気にしなかつた。後輩敏と魔術遠坂の師匠に事情を話してご飯の支度を任せ剣セイバの師匠には修行時間を早めてもらうなどのこととしてなるべく多くの時間、その世界を俺は堪能した。

そこで俺は一人のプレイヤーに出会った。彼はキリトと名乗った。出会ったのも何かの縁だと言い彼とフレンドとなり一緒にゲームを楽しんだ。俺とキリトでゲームを攻略したりレベリングしたり素材を集めたりととにかく楽しかった。俺とキリトはその日以外にも一緒にプレイをした。そうしているうちにβテストが終わった。俺とキリトは今度は正式版で会おうと約束して別れた。

βテストが終わった時、俺は軽くショックを受けた。なぜなら、一生懸命頑張って作ったそのゲームでの自分のキャラのデータが消されてしまったからである。フレンドまで消されてないといいなあ。まあそれでも正式版の発売が楽しみだった。テストである自分達は優先購入権があるため直ぐに買いに行ける。

そして遠坂達にゲームが発売されるまで自分達にご馳走してくれと言われた。まあこの日まで世話を掛けてしまったしこれからももしかしたらゲームで迷惑を掛けてしまうかもしれないからそのお礼として俺が作れる最高の料理を振る舞った。

そして一か月後、とうとうそのゲームが発売された。俺は直ぐに買いに行き、ワクワクしながら正式サービス開始時間までに家での仕事をこなした。夕飯の支度をしたり洗濯物をしまったりしてなるべく遠坂達の仕事を減らした。開始五分前になって後のことを遠坂達に任せて俺は直ぐに準備してそして正式サービス開始時間と同時にログインした。

この時はまだ知る由もなかった。待ちに待ったこのゲームがゲームオーバーと同時に命を落としてしまうデスゲームに変貌してしまうことを。

ソードアート・オンライン。それがデスゲームとなった俺のいや、俺たちの新しい戦いの場であった。

剣の世界

第一話 剣の世界

ログインして俺が今いる場所は噴水のある広場だ。周りを見ると既にログインしているプレイヤーがいる。中には自分のキャラを見て笑っていたりする人までいる。俺も噴水の溜まっている水を鏡のようにして見るとその姿に笑ってしまう。そこにあつたのは赤に近いオレンジの髪が白髪で肌も褐色だ。そして琥珀色だった目はまるで白く濁つたような目だった。その姿はまるでアーチャーあみたいだ。

自分のキャラを確認した後、この後どうしようか悩んでいると後ろから声をかけられた。

「エミヤ？」

「ん？」

振り返るとそこにはまるで勇者のような顔の青年がいた。この顔は知っている。βテストでよく一緒に組んだ相棒と同じ顔だ。

「キリトか？」

俺がそう聞くと彼はパアツと晴れやかな表情になり、俺たちは互いの手を握りあつ

た。

「久しぶりだなエミヤ」

「そうだなキリト」

それから俺たちは歩きながらこれからのことを考えた。

「これからどうしようかキリト」

「そうだな。取り敢えず武器を買いに行こう」

「そうだな」

「よしっ！ そうなれば善は急げだ！ 行くぞエミヤ！」

「ああ！」

そう言っただけで俺たちは走り出した。

「うううん。（何の武器にしようか？ 王道の片手直剣にしようかなあ？ もしくは刀に近い曲刀にしようか？）」

俺は今武器屋のところで何にするか迷っている。かれこれもう五分はたっている。すると噴水広場の方から二人のプレイヤーが走ってきた。

「ん？」

俺は気になって二人の方を見た。

「うおっ?!」

二人はただ走っているだけけどあの動き、間違いねえ! あいつらはβテスターだ!!
二人はそのまま裏路地に入ってしまった。俺は慌てて二人を追いかけた。

俺たちは裏路地に入って真っ直ぐに武器屋に向かった。

「おーい! そのあんちゃん達ー!」

「?」

突然、後ろから呼ばれたので俺たちはそこで止まり振り返った。ふりかけるとそこには額にバンダナみたいのを頭に巻いていてこっちに走って来ている人がいた。

「あんたは?」

キリトがそう彼に聞いた。彼は膝に手を乗せて息を整える。

「ふうー。さっきの身のこなしあんたらβテスターだろ」

「」

さっきの走っているだけで俺達をβテスターだと思ったのか。すごい観察眼だ。

「ああ」

「ちよいとレクチャーしてくれないか」

「レクチャー？」

「おうよ」

どうやら彼が俺達に声をかけたのは俺達はこのゲームについてのレクチャーだった。

「まあそれぐらいなら」

「よっしゃ！俺はクライン。よろしくな」

「俺はキリトだ」

「エミヤだ。こつちこそよろしく頼む」

「おう！」

俺達はそう言つて武器屋で武器を買い草原のフィールドに出た。因みにクラインが武器を選ぶのに10分掛かった。

ドコツ!!?!?!?!?

「イツテエエエ！」

あれから俺たちは街を出て草原のフィールドでクラインにソードスキルについて教えていたのだが、クラインはモンスターに攻撃を受けて吹っ飛んで来た。しかも大袈裟に痛がつてる。一樣痛覚はないんだけどな。

「イテテテテ」

「大袈裟だな」

「一樣痛覚はない筈だけど」

「あつ。本当だ。いや〜ついな。にしても出来ねーな」

「だからさつきから言ってるだろ。ソードスキルは溜めが肝心なんだって」

「つては言うけどあいつ動きやがるし」

「いやいや、モンスターは動くから」

俺達がそう言うときリトは小石を拾った。そしてその石を構え、投擲用のソードスキルを発動した。

「もう一度言うぞ、ソードスキルは、こんな感じでちゃんとモーションを起こせば発動できる」

そう言った後、リトは石を投げその石はイノシシに当たった。

「モーション……モーション……」

それを見たクラインはまるで魔術の呪文の様に繰り返しながら呟き、右手でカトラスを振っている。リトはそれを見て次の説明に入る。

「さつきも言ったけどコツとしてはタメを入れてスキルが立ち上がるを感じたらズパーン！って打ち込む感じ」

「ズパーンって」

キリトの大雑把な説明を聞いて苦笑しながら見ていると今度こそクラインの剣がオレンジ色に輝く。

「おりゃあっ!」

野太い掛け声と同時にこれまでとは変わって滑らかな動きで地面を蹴った。そしてそのままイノシシの方に行き当たった。イノシシはポリゴンになって散った。

「うおっしやあああ!」

派手に喜んでるクラインに拍手をした。

「初勝利おめでとう」

「と言つてもさっきのヤツは他のゲームだとスライム相当だけだな」

俺がそう言うくとクラインはとても驚いた様な顔をした。

「え?俺てつきり中ボスなんかと……」

「な訳あるか」

俺達がそう突っ込むとクラインはがっくりと項垂れた。それを見た俺達は笑い合ひそして色んなことを話した。このゲームのことは勿論、クラインの仲間たちのことや俺とキリトの出会いといった色んな事を話してしばらくすると日が傾いて辺りが夕日に染まった。

「どうする?勘が掴めるまで続けるか?」

「つたりめえよ！………とりたいところだけど………」

そう言うときクラインは腹を抑え視線を右方向に向けた。そこには確か時計があったな。

「腹も減つたしここで一度落ちるわ」

「たしかにここでの食事は空腹感が紛れるだけだからな」

「へへ！五時半にアツアツのピザを予約済みだぜ！」

「用意周到だな」

たしかに用意がいいな。さて俺も遠坂たちに任せるとはいえ、少し早い落ちるとしよう。

「俺もそろそろ落ちるか」

「そういえば家に居候がいるんだっけ？」

「ああ」

キリトがそう言うときクラインがこっちを向いてとても驚いた様な顔になった。

「何？誰かと一緒に住んでんの？」

「まあ、そうなるかな？」

「そして女性留学生らしい」

「なにつ!？」

「なっ!」

キリトがそう言うのとクラインは俺の両肩をがっしりと掴んだ。……今ので地味にダメーヅ食らったぞ。

「今の本当か?」

クラインの顔が俯いていて影ができていて確認できない。そして何故か、凄い覇気を纏ってる。

「本当だけど、どうした?」

そう言うのとクラインは顔をぱつと顔を上げた。そして俺の肩を叩きなら言った。

「羨ましいぜ全く」

「はあ、それよりいいのか?」

「ん?何が?」

クラインは分からないという顔をする。俺は、それに溜息をつき時計のところに指を指す。なんなのかわかったのかクラインは慌て出した。

「おつといっけね。ありがとよ、エミヤ。そんなやな、エミヤ、キリト。」

そう言つてクラインは背を向けてメニューを操作し始めた。俺も同じように操作してログアウトボタンを探す。

「あれ?」

メインメニューをしているとクラインがそんな声を上げた。
「どうした？」

キリトがクラインの方を向いてそう聞くとクラインは俺たちの方を向いて
「ねえ」

と言った。俺は何の事か分からなかったけど自分のメニューを見て何の事かわかった。
た。

「何が？」

キリトがそう聞くとクラインは

「ログアウトボタンがねえ」

と言つてキリトは訳が分からないという顔をする。

「ない訳ないだろ。メインメニューの一番下の方にあるはずだろ」

「だからねえんだって。エミヤは？」

「確かにない」

俺がそう言うときリトは信じられないという顔で自分のメニューを操作する。すると、急に操作していた指が止まる。

「なあ。ねえだろ」

「確かにない。GMコールは？」

「とつくにしているけどなかなか繋がらない」

「多分、混んでいるだろ。今頃、運営は半泣きだろうな」

「お前もな」

「？」

何の事だ分からないクラインにキリトは真っ直ぐ自分の時計のある場所に指を向けた。

「五時二十五分」

「っ！俺のデリバリーピザがあああ！」

「それよりGMコールはどうだ？」

「そっちもダメだ。さっきからコールしているがなかなか繋がらない」

崩れ落ちてるクラインをほつといて俺とキリトは二人で話し合っていた。少ししてクラインが立ち直った。

「まあサービス初日だし仕方なねえな」

「いや、そうとも言えないな」

クラインのその言葉を俺は即座に否定した。

「どう言うことだよ」

「もしこれが単なる事故なら大事件だ。もしかしたらこれからの運営に関わってくるか

もしれない」

キリトがそう言うのとクラインは深刻な表情になって言った。

「じゃあどうすんだよ」

「運営がこれに気づいて全プレイヤーをログアウトさせるか、外部の人間がナーヴギアを外すしかない」

「でも俺は一人暮らしだぜ。二人は？」

「俺はさつきも言ったけれど居候が三人と保護者責任者がいる」

「俺は親と妹が」

キリトがそう言うのとクラインはキリトの肩を掴んだ。

「キリトの妹さん今いくつ」

「今関係ないだろそんなこと」

そんなやり取りしていると何処からか鐘の音が聞こえた。その瞬間、俺達は突然光に包まれ俺は咄嗟に目を閉じた。